

道標ない旅

自分も人も大切に

～思いやり
・チャレンジ
・しなやかな心～

回覧



令和2年度地域版第4号
2020.7.21発行
葉山町立長柄小学校
校長 益田孝彦
Tel. 046-875-6860
Fax. 046-876-0682

<http://www.town.hayama.lg.jp/nagae>

◆◆ 葉山町による長柄小学校避難訓練を実施します。 ◆◆

8月8日(土)は、長柄小避難所運営委員会として避難訓練を行います。時間は10:00～12:00の予定です。日本各地で、コロナウイルス感染下でも、避難所が開かれる実際が続いています。長柄小でも訓練が必要と考え実施します。参加者の方々へは、校長から教室開放計画等を詳しくお話する予定です。

加えて大塚製菓と葉山町の防災協定で、飲料360本、食品90個を備えた自動販売機を長柄小学校に設置することが決まりました。日常的には学校に来校された際、普通の自販機としてご利用下さい。災害時には実際に大きな貢献も期待できます。設置されたらお知らせします。上手に活用できればと思います。

◆◆ ご迷惑をおかけしています。休校の「レベル3」規定は、混乱を避けるため町内統一で削除します。 ◆◆

この梅雨時、葉山町は大雨に襲われ町内に「レベル3」が出ている状況を迎えました。「レベル3」なら休校のはずなので、地域の方々も対応がおかしくないかと疑問に思われた方もいらっしゃると思っています。

そもそもこの休校は・・・千葉で鉄塔が倒れたコンパクトな台風などの接近時、町内に台風が来ると分かっているながらも、その6～7時間前は、強風も雨も全く感じさせず、台風が気配も見せず近づいていました。時間帯を学校にずらして考えると、登校時は気配がないので登校したが、下校時刻付近では、外を歩ける状態ではないこととなります。高齢者等避難(レベル3)は、なるべく高齢者の方々が動ける状況で出るので、判断する良い目安と考えたのです。さらに、暴風警報だけで対応すると、線状降水帯による大雨で、河川の氾濫や土砂災害危険性が高まる中、登校させる危険性があるので、土砂災害でのレベル3を適用し、児童・生徒の安全を事前を守ろうと考えました。ところが、長雨が続き、土砂が含む水分量が危険な状態になり、さほどの大雨ではなくともレベル3が出てしまうことも今回はっきりしました。風雨の心配が比較的少ない状況でも、レベル3が午前6時半現在で出ていて、「休校」判断が逆におかしな場合が起こってしまうのです。

今年度より「レベル3」を休校判断に加えたばかりでしたが、実際に運用してみると、後段の休校判断にふさわしくない事例が、立て続けに起こってしまいました。校長会では早速協議し、「レベル3」表現は全面的に削除。休校の条件からはずしました。前段のようなケースが予想される事例には、個別に連絡を取り合い、なるべく登校時間に間に合うように「休校」の連絡メールを別途配信することで対応していくこととなりました。

◆◆ 今年の夏は、海遊びが大変心配されます。 ◆◆

ご存じの通り、神奈川県は、海水浴場を開設しません。その結果、監視所、監視台、遊泳区域を示すブイなし、救護員の配置なし、「海の家」もありません。極めつけが、ライフセーバーが配置されず、いつもならボードを用意して、遊泳中に溺れた海水浴客を救助に向かってくれる人がいません。ビーチパトロール員として参加されるそうですが、浜で起こったケガのみに対応し、海に泳ぎ出る任務はありません。子どもたちが遊び心で海に入り、クラゲなどに刺されて溺れても、磯遊びで溺れても、今年は助けがありません。

組織的な対応がない点で、風紀面でも今年の夏の海浜は心配されています。児童の遊びたい気持ちはよくわかります。その気持ちに応えるとしたら家族の付き添いと見守りは絶対必要だと思います。安全に過ごせる夏休みであってほしいと心から願います。



◆◆ 先日葉山町 PTA 連絡協議会に参加させていただきました。 ◆◆

印象に残ったことが、夏真っ盛りの登下校を心配されていることでした。「熱中症のリスクについて学校や町教委はしっかり考えてくれているのだろう」というご発言があり、そこで私は、「雨傘・日傘による熱中症対策行為が全体のムーブメントになれば良いのだが、児童ひとりの力で傘をさして登校するのは、勇気がいって難しい。大変有効な熱中症対策なので、葉山町全体で対策として児童が実行できるムードづくりが必要」とお話ししました。まずは長柄小が率先者になれるよう力を尽くしたいと思います。

そしてもう一つの話が、TV番組「噂の東京マガジン」でも取り上げられていましたが、逗子海岸(葉山の海岸)が海水浴場として開設しないことへの不安でした。番組では、海の家や監視所・監視台等が設置されないことから起こる治安の乱れ、安全の大幅低下が課題として浮かび上がっていました。事実映像では、今年の土日の晴れ間の様子だと思われそうですが、遊泳区域がないので、サーファーの方々と海辺で水遊びする方々が交錯する事故が起こりかねない様子が流されていました。海に来て欲しくないとする住民の方の意見や、海に来ないわけがないとする住民の方の考えなど、地元の方々の考え方もバラバラな様子が紹介されていました。この夏の海、保護者の方の監視の目のないところで海には行かないようにお伝えしましたが、本気でお子様を守っていたかかないと、大きな事故が起こりかねないと、葉山町 PTA 連絡協議会の皆さまも考えていらっしゃいました。

◆◆ 朝の集いで、リモートサイエンスショーを実施しました。 ◆◆

「児童の学校生活を豊かで楽しいものにしたい」と、長柄小学校の先生方は様々な制約の中、頑張ってくれています。その姿に触発され、私も、十八番のサイエンスショーをできないか考えてみました。



その結果、「音のクイズショー」なら、放送でやっても楽しく、学び甲斐がありそうと思いました。出題は3問。

①長さの異なる3本の筒をスリッパでたたき、一番短い筒を予想する。②ストロー笛を吹きながら、音の高さを変えていくやり方は？。③半分水の入ったワイングラス（グラスハーブ）の音が変わった理由は？でした。

…と、児童の回答を早速丸付けしていたら、児童から寄せられる、大歓迎の声と、次回への期待のすごさを確認しました。それとともに、答えが知りたいという声が先生方に寄せられているとのことで、簡単に解説します。

「筒は短いほど高い音になります。だから、ストローを切っていくと短い筒のストローになるので、音が高くなります。高い音を出すピッコロは短いですね。一方、グラスハーブ（教会やお寺の鐘）は、重くなるほど音が低くなります。水を減らすと軽くなるので音は高くなります。お寺の鐘は重そうですね。低い音になります。

ちなみに、写真の一番短い筒は、一番長い筒のちょうど半分長さです。長さが半分になると1オクターブ音の高さが上がります。写真の筒は、ド（長）レミファソラシド（短） の関係になっています。」

◆◆ with コロナ時代ってどういう意味でしょう。参考になる知見録を見つけました。 ◆◆

『with コロナ時代のトレンド “開疎”な未来を考える』 慶應義塾大学教授で、ヤフーCSO 安宅和人氏の知見録を読みました。同じ指摘を日曜日朝のサンデーモーニングの番組最後でも扱っていました。一つの考え方として大変重要な要素があると思いますので、要約してお伝えします。ご興味のある方はお読み下さい。

『with コロナ社会は、当面続くと思った方がいい。日本はともかく、世界規模で起こっている混乱が、あと数ヶ月で落ち着くと言うことは考えにくい。突然毒性が弱まる可能性は低く、物理的な封じ込めができないとすると、本質的な解決策は2択しか考えられない。「①集団免疫を獲得する、②特效薬を開発する」、である。ワクチンについては現在開発候補品が100以上あるとされているが、楽観的なシナリオでも実用化は来年以降のことと思われる。自然感染に任せる場合について考えると、入院が必要な重症化率を2%とし、感染症病棟(約30,000床)のキャパいっぱいに対応し続け、人口の70%までの免疫形成を図ろうとすると、日本国内だけでも計算上2年はかかる。

つい100年前までヨーロッパでは7人に1人は結核でなくなっていた。日本では1940年代になっても死因の第一位は結核であり40年位前までは日本中に結核隔離病棟があった。つまり、伝染病と共に生きる時代は社会は突然誕生したものではなく、われわれは再び病原菌、ウィルスと共に生きる時代に戻ったに過ぎない。

感染症と共に生きるという前提で今後を考えるとしたら、

- ①密閉→開放
- ②高密度で人が集まって活動→疎に活動
- ③接触→非接触
- ④物以上に人が物理的に動く社会→人はあまり動かないが物は物理的に動く社会

の4つの方向性を考えなければならないと思われる。この②と③はかなり束ねることができるので「開放×疎」に向かう、すなわち「開疎化」と言うかなり強いトレンドが生まれると言うのが見立てである。

都市的な空間に資源と人が集中し、人間は長らくその恩恵を享受してきた。少なくとも5000年は、この「密閉」に向かうマイクロトレンドが続いてきたと考えられる。ただ、中世のペストや100年前の結核やスペイン風邪などの伝染病が蔓延した頃から分かっていたことだが、都市は病原体、特に感染症にはめっぽう弱く、学校・オフィス、軍隊、工場のような人が集まる場所が、細菌の温床となってきた。「密閉空間」は行き詰まっているのである。「いつになったら元通りの(＝密閉の)状態に戻れるのか」「(そこに戻るために)自分たちはどうしたらいいのか」と毎日のように尋ねられるが、「開疎」というトレンドに沿って考える力が、今私たちに問われているのではないかと思う。

2019年7月に発表された「2100年の天気予報」と言う環境省の予測では、有効な温暖化対策が取れなかった場合、夏には全国各地で気温が40度を超え、風速90メートル級のスーパー台風がやってくるだろう、と予想されている。風速90メートルとは家が倒れる速度である。勧告通りの抑制に成功しても、荷物を積んだトラックが倒れるレベルの風速70メートルの台風が予測されている。それだけではない、あと数十年のうちに北極海の氷は一度は溶けきると考えられているが、さらにシベリアの永久凍土も溶けたら、今まで眠っていたウィルスや細菌が表に出てくる可能性は高い。その時われわれはもう一度、様々な伝染病の危険にさらされるであろう。その中には、毎年大陸方向から舞ってきて始まるインフルエンザのように、空気感染するものもあるだろう。一過性の辛い時期と考えるのは少々甘いだろうと言うことである。この機にいずれ来る変化に備えて、できる限りの刷新を図るべきである。』

……大変示唆的な指摘ではないでしょうか。私たちは「密閉」にいつ戻れるのだろうと考えてしまいがちですが、5000年続いたその考え方を大きく変えるときが来たのでは？と言われているのです。通勤しないリモートワークがトレンドになれば、都市集中のスタイルは様変わりする可能性は確かに感じます。実際、永久凍土が溶け始めたニュースが入ってきています。真剣に受け止める必要があると思います。